

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**  
**在外研究**  
**2016年度研究成果報告書**

研究代表者	所属部局・職		氏名	
	文学部・教授		加藤 磨珠枝 印	
研究課題	西洋古代末期から中世初期におけるキリスト教美術研究			
全研修期間	2016年 3月28日 ~ 2017年 3月30日 (368日間)			
経費	年度	SFR申請額	所属学部からの補助額	SFR助成額
	2015年度	円	円	円
	2016年度	3,421,008円	2,000,000円	1,421,008円
主な滞在国及び研究機関名	国名	研究機関名		
	イギリス	オックスフォード大学古典学部		

**研究成果の概要** (図・グラフは使用しないこと)

今回の在外研究成果の一部は、イギリス滞在中にすでに数度にわたる口頭発表の形式で海外研究者へ向けての発信が行われ、国内の研究者・一般読者へは書籍刊行を通じて公表されている(詳細は「研究発表」の項目参照のこと)。その内容は主に以下の3点に集約される。

(1) 2世紀から4世紀にかけてローマ帝国で繁栄した諸宗教(ローマ伝統宗教、ユダヤ教、キリスト教、ミトラス教など)の美術についての研究。これらの聖所を飾る「庭園画」に注目し、最新の研究動向と現地調査から得られた知見を用いて、当時のローマ市民が共有した楽園の世界観について考察を行った。季節の花が咲き誇り、果実が実を結び、数々の野鳥が集う庭園画は、ローマ皇帝アウグストゥスの時代から、帝国の繁栄を象徴する絵画表現であったが、それは古代末期にいたるとミトラス教のように本来オリエント起源といわれる密儀宗教の礼拝所や、初期キリスト教会堂装飾にも導入され、ローマ文化と密接に結びついて発展した。彼らの美術は、信じる神々の名前は違えども、同じローマ社会を生きる信者たちの共感しうるメッセージとして広く流布していた可能性が示された。これは古代末期を「キリスト教美術の誕生から発展」の時代としてとらえる従来の発展史的な美術史観とは異なり、当時をより多面的な一つの社会としてとらえる試みである。

(2) 4世紀から9世紀の初期中世ローマで興隆した聖人信仰とその聖遺物崇敬をめぐる造形美術についての研究。ここでは都市ローマに現存する当時の教会群のなかでも、特に聖人の聖遺物を納めた祭壇およびその周辺の絵画表現に焦点をあてて考察を加えた。研究対象は以下の通り。現サン・ジョヴァンニ病院地下で発掘中の礼拝堂壁画(4世紀)、サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂地下の礼拝堂(4世末~5世紀)、サンタ・マリア・アンティクア聖堂(6世紀~9世紀)、サン・クリソゴノ聖堂(8世紀)、サンタ・ブラッセーデ聖堂(9世紀)。これらの絵画表現は、当時のローマ教会が奨励した聖遺物信仰のキャンペーンと密接な結びつきを確認できることから、初期中世ローマ美術において、教皇が果たした重要な役割を浮彫りとする結果となった。それに加えて、当時次第に対立を深めていた都市ローマとビザンティン帝国との関係が、その属州であったラヴェンナ美術を介して再考された。結果だけを略述すると、ビザンティン帝国の属州であったラヴェンナは、751年にランゴバルド王国によって占領された後、フランク王国の小ピピンによって奪取され、有名な「ピ

**研究成果の概要 (つづき)**

ピンの寄進」によって 784 年にローマ教皇領へ移行したと一般的にいわれている。しかし、都市ローマの美術からは、すでにそれよりも早い時期 (8 世紀前半) からラヴェンナとの強力な共同関係が認められる。すなわち、美術史的な考察にもとづくなれば、ローマとラヴェンナは、それが政治的に教皇に寄進される以前から、すでに教皇の手中に収められていたと考えられ、これは初期中世ローマと他の地域の影響関係を考える上でも重要である。

(3) 上記の研究成果を総合する形で、初期中世ヨーロッパにおいてローマ美術の果たした役割についても考察を加えた。古代末期から中世初期にいたるヨーロッパは、ゲルマン系諸民族の大移動と新たに勃興するイスラーム勢力の躍進によって、大きな混乱期を迎えた。この時代は、現存作品が乏しく断片的であることから、西洋美術史のなかでも停滞した時代と一般的に捉えられている。しかし、今回の在外研究により、ヨーロッパ各地の近年の研究成果をまとめあげ、グローバルな視点から再解釈することにより新たな美術史観を構築することがある程度できたと思われる。その成果は中央公論新書の西洋美術史全集第 2 巻『キリスト教美術の誕生とビザンティン世界』として国内ですでに発表した。

以上より、本研究課題とした西洋古代末期から中世初期におけるキリスト教美術研究は、ローマ・ヘレニズム世界の伝統を踏まえつつ、新たに登場したゲルマン系諸民族の活動とイスラーム世界をも視野に含めて論じる試みとして、一定の成果を収めることができた。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを 5 項目で記入)

[古代末期美術] [初期中世美術] [キリスト教考古学] [ミトラス教美術] [ 教皇庁 ]

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

## ① 論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

- ・ 加藤磨珠枝「オスティア・アンティカから考える古代末期ミトラス教美術—七つの門のミトラエウムを中心に」、坂口明・豊田浩志編、勉誠出版、『古代ローマのオスティア・アンティカ研究の最前線』、2017 年、243-284 頁
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
  - ・ 共著 加藤磨珠枝、益田朋幸、中央公論新社、『西洋美術の歴史 2 キリスト教美術の誕生とビザンティン世界』、2016 年、607 頁
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
  - ・ Masue Kato, “The art of Pope Gregory III (731-741): early medieval Rome between Byzantium and Lombard kingdom” in Late Antique and Byzantine Art and Archaeology Seminar, 2016 年 11 月 11 日, The Ioannou Centre, Seminar Room, University of Oxford
  - 加藤磨珠枝「ローマ教皇グレゴリウス 3 世 (731-741) の美術: ビザンティウムとランゴバルド王国の間の初期中世ローマ」、於古代末期およびビザンティン美術・考古学セミナー、オックスフォード大学古典学科ヨアンヌセンター、セミナールーム
  - ・ Masue Kato, “The Transformation of Garden Painting in Late Antiquity” in Short Talks by Visiting Scholars and Research Members of Common Room on their research, 2017 年 2 月 27 日, The Haldane Room at Wolfson College, University of Oxford
  - 加藤磨珠枝「古代末期における庭園画の変容」ウルフソン・カレッジ客員研究員・リサーチフェローによる研究紹介、オックスフォード大学ウルフソン・カレッジ内ハルデー・ルーム
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)
  - ・ Masue Kato, “Church Decoration and Relic Translation in Early Medieval Rome” at The International Medieval Congress in University of Leeds, as a part of European Research Council Project ‘The Cult of Saints’ sponsored by University of Oxford, 2016 年 7 月 7 日, University of Leeds
  - 加藤磨珠枝「初期中世ローマにおける教会堂装飾と聖遺物奉遷」、欧州研究会議助成によるオックスフォード大学主催「聖人信仰」研究プロジェクト部会、リーズ国際中世学会、於リーズ大学

※この(様式 2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。